

伊豆の踊子

かわばた やすなり さく
川端 康成 作

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思うころ、雨足が杉の密林を
白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。

私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白の着物に袴をはき、学生カバンを
肩にかけていた。一人伊豆の旅に出てから四日目のことだった。

修善寺温泉に一夜泊まり、湯ヶ島温泉に二夜泊まり、そして朴歯の高下駄で天城を

登って来たのだった。重なり合った山々や原生林や深い溪谷の秋に見とれながらも、

私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでいるのだった。

そのうちに大粒の雨が私を打ち始めた。折れ曲がった急な坂道を駆け登った。

ようやく峠の北口の茶屋にたどり着いてほっとすると同時に、私はその入り口で

立ちすくんでしまった。あまりに期待がみごとに的中したからである。

そこで旅芸人の一行が休んでいたのだ。

突っ立っている私を見た踊子が、すぐに自分の座布団をはずして、裏返しにそばに置いた。

「ええ…。」とだけ言って、私はその上に腰をおろした。

坂道を走った息切れと驚きとで、「ありがとう。」という言葉がのどに引っかかって出なかったのだ。

踊子と間近に向かい合ったので、私は慌てて袂から煙草を取り出した。

踊子がまた連れの女の前の煙草盆を引き寄せて私に近くしてくれた。

やっぱり私は黙っていた。

踊子は十七くらいに見えた。私にはわからない古風の不思議な形に大きく髪を結っていた。

それが卵型のりりしい顔を非常に小さく見せながらも、美しく調和していた。髪を豊かに誇張して

描いた、稗史的な娘の絵姿のような感じだった。踊子の連れは四十代の女が一人、若い女が

二人、ほかに長岡温泉の宿屋の印半纏を着た二十五六の男がいた。